

熱田優子さんの思い出

尾形明子

一枚の絵がある。

五十号の画面の中央に、丸顔の勁い線をもった若い女がこちらを向いて寝椅子に横たわっている。その右後で若い男が、彼女に背を向け、カンバスいっぱいに向日葵の花を描いている。油絵具はすっかり乾いて所々ひびが入っているが、色は暗く重い。タッチは強い

というより、どこか荒々しく、若い男女に漂うものも、甘やかな俵わせそうな雰囲気ではなく、言うなら非日常の激しさである。

モデルは、新婚当時の林芙美子と夫の画家緑敏。昭和四年の夏頃の絵であろうか。描いたのは熱田優子。当時二十五歳。「女人芸術」編集部に入って間もない新進画家だった。

この絵に出会って、もう八年になる。「女人芸術」を調べ、当時の関係者の聞き取りをする中で、熱田さんにも出会ったのだった。

新中野の、鍋屋横町にある古い公団住宅の五階に、熱田さんは友人の作家内田生枝さんと暮らしていた。そこにどれだけ通い続けたことだろうか。廊下に新聞紙に包んで立て掛けられていたその絵を見せたいだいたのは、伺って、二、三回目だったように思う。

先入観の中で、熱田さんは少々気の重い人だった。気さくで明けっぴろげに何んでも語って下さる横田（文子）さんや、その青春を刻んだような四十八冊の「女人芸術」を、いつまでももお持ちなさいと無雑作に貸して下さった若林（つや）さん、出会った時から古い友人のように信頼して下さった望月（百合子）さんや、親類の小母さんのような平林（英子）さん、若々しさと情熱と愛らしさで私を魅了した城（夏子）さん、そうした方々から熱田さんは常に一目置かれ、いい人らし

いけれど気難しい人のイメージが私を尻込みさせていた。熱田さんに会うことによって、不明な点の大半が埋まるであろうことを十分承知しながらも、お目にかかる時を延ばし延ばしにしていた。

それにその頃、私はそれこそ生まれて初めて、忙しい最中にいた。博士課程の学生だったが、五月に長男を生み、まだ立正女子短大といっていたこの学校で女性史のゼミを持った。出産予定が遅れたために、初めてのゼミは五月半ばになってしまった。出産一週間後、少しフラフラする体で電車で揺られ、その日しゃべるノートをまとめながら、ひどく不安でセンチメンタルな気持ちに襲われていた事を思い出す。学生と母親業と、初めての教師としての立場と——夢中で過していた日々

に少しでも抵抗ありそうな人との出会いは憶

却だった。

その日、私は手いっぱいには日向日葵の花束を持っていたから、多分夏休みの頃だったのだろう。お目にかかった熱田さんは、色白の和服姿のしゃきっと美しい人だった。私が差し出した向日葵が絵を見せて下さるきっかけになったのではないかと思う。

裕福な山の手の医者のお家に生まれ、恵まれた少女時代を過ごした熱田さんはお茶の水の高等女学校を卒業した後、春日町の川端画塾で絵を学び、かたわらアテネフランセに通う。

そこで、フランス留学を目前にした長谷川時雨の妹で画家の春子に出会い、春子の代りとして女人芸術社に入るのだが、「女人芸術」廃刊後も「輝夕」を編集し、戦後は二十一年近く、労働省婦人少年局の機関誌「婦人と年少者」を編集するなど、編集者としての道を歩ききつかけが、春子との出会いだった。すでに「女人芸術の人びと」(ドメス出版一九八一・一一)で、熱田さんの生について書いたが、「女人芸術の世界」(ドメス出版一九八〇・一〇)と合わせて、熱田さんにどれだけお世話になったことか。

メモを片手に、早口に次々と質問していく私に、細い綺麗な歯切れよい声で、熱田さん

は驚く程の明確さで答え続け、時折、おかしそうに「ほほっ」と笑って、「まあお上がれ」と手作りのおすしや煮物、季節のものを勧めて下さったものだった。横で内田さんが煙草を気ぜわしそうに吸いながら、「だけどもまあ、あなたもよくやるわねエ」と暖かな口調で言い、おいしいお茶を入れて下さる——帰るのが辛くなる程に居心地のよい部屋であり、お二人だった。

生まれたばかりの長男は、もう小学二年生になり、その間に次男が生まれ、五歳になった。保育園に迎えに行く時間ばかりを気にし、あるいは出産前、息を切らせている私に、熱田さんの少し照れたような優しきやいたわりは素直にしみた。

「もう少し華やかな女っぽいものの方が似合うのに。ほらこんな感じ」と言いながら、私の顔をメモ用紙に描き、柔らかなフリルのついたワンピースをデザインして下さったことがある。昭和の初め、断髪に洋装で通した人であったことを改めて思い出し、私の感じがよくでているデッサンの見事に驚かされた。協力者に恵まれてはいても、毎日を追わ

れるように過していた日々、私は黒っぽくカッチリとした服を着ることで、崩れそうな自

分を辛じて鑑うていたのかも知れず、それを承知した上でアドバイスだったのだろう。

昨年九月、熱田さんは七十八歳の生涯を閉じた。五月の末に入院してから四か月、痛は手術できない程に広がっていた。熱田さんの好きなバラの花を抱え、とりとめのない話をするくらいしか、私にできることとてなかつたが、とりとめのない話の中で、熱田さんは鮮やかな素顔を私に見せた。

五十号の絵のあの不思議な暗さと荒々しさを、理解したように思えたのもその頃だった。日常化することを許されない愛に、十代から三十代の半ばまでを生きた人でもあった。画面を覆う激しさは、熱田さん自身の思っていたのだろう。「そのあとの人生はおまけ。おまけの方が長くて」——そう呟いて熱田さんは目を閉じた。聞く私にとっても辛い話だった。

亡くなられた日、新聞社から熱田さんの職業を問われて、私はふと「画家」と答えた。

息を引き取る間際まで、若い日に描いた絵を熱田さんは気にかけていた。熱田さんの見果てぬ夢が画家であったように思えたのだが、あるいはそれは、更にもうひとつ別の見果てぬ夢の別名であったのかも知れない。